

北海道における初期農耕関連資料 III

—北大構内の遺跡〔8〕（昭和64年度）北海道大学1990年発行 抜刷—

1990

北海道大学 文学部
基礎文化論講座人類学研究室

吉崎 昌一・椿坂 恭代

1 報文の目的

1986年度に報告された本学構内の擦文文化の集落址サクシュコトニ川遺跡は、良好な文化遺物包含層に伴って多数の自然遺物が発見され、この文化の分析のために欠かせない資料となっている(北海道大学1986)。基準になる人工遺物については、既に刊行された報告書の中で横山が詳細な分析を行っているが、20万点以上検出された植物性遺物については、その数量の多かったことや、我々の研究設備あるいは知識の不足していたこともあって、十分な分析にまでには至っていない⁽¹⁾。しかし、その後資料が蓄積され、他の遺跡との比較が可能になってきたので、研究面でも新しい展開が見られるようになった。また、最近では各地の発掘で同種の自然遺物が多量に検出されるようになり、これらとの比較も必要になってきている。その情報にも触れながら、作業の一端を報告しておきたいとおもう。同時に、前回の報告書の一部も簡略に紹介し、あわせて、その後北海道大学埋蔵文化財調査室のなかでの研究討論も加えておきたい。

2 遺跡の位置・調査主体の概要

サクシュコトニ川遺跡は、北海道札幌市北区北17条西17丁目3番地に位置し、北海道大学札幌団地内北部に広がっている。発掘調査は、北海道大学が計画した新学生寮(恵迪寮)の建設に先立って実施されたものである。

調査の主体は北海道大学、発掘と出土資料の整理ならびに研究は、北海道大学埋蔵文化財調査室が担当した。

発掘作業は1981年(昭和56年)8月14日に開始され、翌1982年(昭和57年)9月24日に終了、その間に5,904m²が調査されている。

3 遺跡の立地・層準・遺構

遺跡周辺は、土木工事や耕作などで原地形面がほとんど残されていない。しかし、この地域の記されている初期の地形図や、発掘時の所見ならびに航空写真から判読された植生の変化などを総合すると、現在の北海道大学構内の西部に痕跡的な流路の見られるセロンベツ川と、構内中央部を北西に縦断していたサクシュコトニ川があり、この両河川の合流点にはさまれた舌状に広がっている標高約11mの微高地上に、古代集落の形成されていたことがわかる。

遺跡周辺はきわめて湿潤である。そのため大学構内の土地としては、あまり活用度の高くなかった地域といえる。融雪の時期には長期にわたって水がたまり、水はけも劣悪であった。それ故、寮建設以前に準硬式野球場として利用されていた頃は、野球部の部員達はグラウンド整備のための排水に難渋していたという。

発掘区の地層は、地表を含めて肉眼でI層～VI層に大別され、各層はさらに砂や粘土の含有状況で細分されている。しかし、全層準ともシルト質の堆積で、その構成物質はほぼ同じである。第III層中には植物の炭化細片が混在し、土器片などが集中して出土する部分が検出された。これを第1文化層として扱ったが、遺構は焼土が1ヶ所検出されただけで、他は確認することが出来なかった⁽²⁾。第IV層の上半部は無遺物の堆積となるが、その基底近くから第V層の上面にかけては多量の遺物と竪穴住居址5軒、土壇6基、ほかに集石遺構と土器片や炭化植物片が密集した廃棄スポット⁽³⁾などの遺構が検出され、第2文化層として扱われた。第VI層からは文化層として認識出来なかったが、続縄文時代の土器片3点が検出された。これを、一応、第3文化層として扱った⁽⁴⁾。つまり、サクシュコトニ川遺跡においては、それぞれ無遺物の地層を挟んで、上位にいわれる擦文時代の文化層が2層、最下位に続縄文土器を二次的に含んだ地層が確認されたことになる。

これら全ての遺構や遺物類は、前にも述べたようにシルトやシルト質砂層の堆積によって覆われていた。おそらく、第1・第2文化層とも、ある時期には緩やかな流水下での堆積物が覆ったのであろう。とくに第2文化層の土器の中には、表面にリモナイトの凝集するものがあり、また、地点によっては高師小僧の出土がよく見られる。これらは、集落の置かれていた自然環境を物語っているであろう。しかし、洪水⁽⁵⁾が、ある日突然に集落を廃絶させたと言う根拠もない。なぜなら、出土した土器の殆どが廃棄状態または破片の集合という状況で検出され、使用時のままで発見されたものは、1号竪穴住居カマドの焚き口にセットされていた中型のカメとその下部の支脚用として転用された小型カメ、もう1例は1号土壇内に2個並んで倒立状態で発見された大型カメの2ヶ所のみであるからだ。急激な洪水の到来で集落が放棄されたのだとすれば、住居内に残されていた土器の量が

0.9 mm, 厚さ 0.5 mm ほどである。炭化あるいは未炭化, 内外穎付きのものを含むので, 正確な比較は出来ないが, 傾向は理解出来るだろう。

◇ヒエ?◇ アワと並んで雑穀の中で重要な位置を占めるものにヒエがある。我々もこの遺跡の植物種子研究の当初から, ヒエの検出に努力を払ってきた。だが, 栽培ヒエ *Echinochloa utilis* については, いまだに問題が残されたままである。Crowford は, 1986 年度の報告中のなかで, ここから出土したアワ・キビの中にヒエが混在しているかもしれないと指摘している (Crowford 1986)。しかし, その後の作業では, 現在栽培されているような確実な「栽培ヒエ」と全く同じ形態のものは, いまだに検出されていない。いまのところ, この時期とは関係のない縄文時代の前期から後期にかけての栽培種とみなしてよさそうなヒエ (小笠原 1986) と, 余市町教育委員会が調査中の大川遺跡—歴史時代の例 (未報告) が確認されているだけである。奇妙なことであるが, ヒエに関する限り, 擦文文化に属する他のどの遺跡においてもサクシュコトニ川遺跡同様の事情であるらしい。この点に関しては, 我々の共同研究者でもある G. Crawford の研究室での観察結果も同様であるという。ヒエを遺伝学的に調査した藪野友三郎によれば, 日本の栽培ヒエの祖先種は, 東アジアのイヌビエ *Echinochloa crusgalli* であることが判明しているという (藪野 1981)。また, 北海道においては, アイヌ民族の保持していた雑穀農耕や伝説の中にもヒエが存在しているので (林 1969), そのルーツは古くまでさかのぼるとみた方がよい。一方, 佐々木高明をはじめとする民族学者の見解によると, 日本列島のヒエは, 稲作農耕の伝来以前に渡来し, 各地の焼畑雑穀の中で重要な位置を占めていると考えられると言うのである (佐々木 1971)。このように, 複数の研究領域のデータからヒエが古い雑穀であることが予測されているにもかかわらず, 発掘資料によるかぎり, 擦文時代の栽培ヒエの実態はまだ不明確である。

第II図 10, 11a~b にはサクシュコトニ川遺跡出土のヒエまたはイヌビエと見られる標本の走査電顕 (SEM) 像, 第II図 12a~b は, 札幌市K 441 遺跡北 34 条地点で出土した西暦 10 世紀代のヒエと思われるもの。同 13a~c が現生のイヌビエ, 同 14a~c が現生のタイヌビエである。同 15a~c は現生の栽培ヒエ。これらを比較してみると, サクシュコトニ川遺跡出土の種子はイヌビエに類似することがよくわかる。また, 幅ならびに側面の形態が, 現生のイヌビエと栽培ヒエでは膨らみが違い, 判別出来る。

かつて, 筆者の一人吉崎は, 擦文時代遺跡出土のヒエあるいはイヌビエについて, 炭化種子の形態的変異のみで栽培のものであるか非栽培のものであるのかを決定することには無理があると考え, むしろ, 人間の利用状況を考古学的に確定することが, 判断のてがかりになるのではないかと述べたことがある (吉崎 1989)。だが, こうしたアプローチが成功している訳ではない。したがって, これらの問題が解決するまで, 擦文時代の遺跡から出土するこの類の種子に「擦文ヒエ」の名称を仮に与え, 将来の研究課題としておきたい。

参考までに, 北海道各地出土の擦文時代主要遺跡から検出されたアワ・キビ・擦文ヒエの計測値を 表に示しておく。

◇オオムギとコムギ◇ サクシュコトニ川遺跡から出土した植物種子で, 前述の雑穀類に次いで多いのはオオムギ *Hordeum vulgare* とコムギ *Triticum aestivum* である。現在までに調べられた個数は, オオムギがおよそ 20000 粒ほど, コムギがおよそ 6000 粒ほどである。オオムギとコムギは炭化した穎果だけではなく, 穂軸も多量に検出されている (III図 18, 19)。今迄のところ, 日本列島の諸遺跡からこのようなムギの穂軸の出土が報告されたことはないように思う。だが, 今後出土炭化物の精査が進めば, 各地の遺跡から大量に検出されるものと予想される。穂軸は, 発掘区全域にわたる検出作業が終了していないため, 最終出土個数などについては不明である。だが, 炭化物 16 と名付けられた廃棄スポットからは 1500 個, 同 19 から 6 個, 炭化マウンド—大型の廃棄スポットと考えられる—から 48 個検出されている。チェックの終了した区域の状況からすれば, 穂軸の出土分布には明らかな偏りがあり, この集落の屋外で実施されていた脱穀作業の様相を窺い知ることが出来よう (椿坂 1989)。

検出されているオオムギは 6 条オオムギで, 北ヨーロッパに普通に見られるタイプにちかい。オオムギは渡島管内松前町札前遺跡 (山田・椿坂 1989) のほか, 本州にも東京都早瀬前遺跡から好例が知られている (南木 1988)。また, 青森県南津軽郡杉の沢遺跡第 1 区において 10 世紀とみられる 4 号土師竪穴住居から約 200 粒出土し, 原報告ではコムギと記載されている資料も, 写真で判断する限り同種ものと思われる (奈良岡 1979)。第III図 16a, b にサクシュコトニ川遺跡出土のオオムギ, 同 20 a, b は札前遺跡出土の西暦 11 世紀のオオムギ, 同 22a, b は十勝太若月遺跡の 11 世紀末と考えられる焼失住居から大量に検出された若干形態の異なるオオムギの例をあげておく。これらの資料は全て擦文文化に所属する住居から

発掘されたものだが, これ以外に網走市二ツ岩遺跡で 8 世紀後半のオホーツク文化に共伴したもの (第III図 23a, b) を加えておこう。

◇Crawford からも指摘しているように, この遺跡から出土したコムギ (第III図 17a, b) はきわめて小型である。第表にその計測値を示しておくが, これほど小型のコムギ (コンパクト・コムギ) は世界でもあまり知られていないらしい。それで, 発掘当初から我々の間ではこのコムギに対してエゾコムギという仮称が与えられていた。しかし, 発掘で検出されているのは, 全て穎果と穂軸のみで, 低湿地遺跡にしばしば見られるような保存の良好な穂そのものなどが出土しておらず, 分類上の細かな帰属などにはわかには決定出来ない。しかし, 他の考古学的資料と大きさを比較すれば, 第 I 表に示すような位置におちつくのではなからうか (Crawford and Yoshizaki 1987)。北海道以外の地でもこの種のコムギの出土が見られる。平安時代に属する京都市西大路七条井戸から検出されたコムギ (岡田 1985: 72, 図版 27) は Crawford によってコンパクトタイプであることが確認されているし (Crawford and Yoshizaki 1987: 212), 西暦 9~10 世紀とされる東京都板橋区早瀬前遺跡からも同種のものが検出されている (南木 1988)。また, 直良信夫が朝鮮半島の西暦 8~9 世紀代として報告した扶余の炭化コムギは, 計測値の平均が 4.1 mm, 2.2 mm, 1.8 mm (直良 1956) でこれに類似する。しかし, これらの小型コムギが, すべて同一の種として同定し得るのかどうか, さらに, これらが分類学上のいわゆる *Triticum aestivum* ssp. *compactum* などのコンパクトタイプ・コムギとどのような関係にあるのかは, まだ若干問題が残っていて結論が得られていない。北海道内でサクシュコトニ川遺跡出土の小型コムギと同種と思われるコムギは, 札前遺跡からも検出されている (第III図 21a, b)。この遺跡で出土したコムギも, 小型のものばかりであった (山田・椿坂 1989 a)。ただし, 1989 年度までの我々の調査では, 北海道におけるこの種の小型コムギの出土例は, それほど多くはない。これまで述べてきたサクシュコトニ川遺跡とここに紹介した札前遺跡の 2 か所からしか知られていない。

◇擦文オオムギ?◇ 出土オオムギとコムギについて擦文時代の諸遺跡資料を追跡中に, もう一種類異った形態を持つオオムギに気付いた。面白い事に, オオムギの資料数が豊富なサクシュコトニ川遺跡からは, 同形態のものが見つからない。通常のおオムギと比較して長さの点

ですずまりの傾向を見せるグループで, 当初, 加熱による発泡が原因で変形した可能性を無視出来ないと考えていた為, 資料の同定に際してオオムギかコムギかの判断に混乱が生じていた。例えば, 札幌市K 441 北 34 条地点遺跡 (吉崎 1988 a, 1989 b) ではコムギ?, 網走市二ツ岩遺跡においてはオオムギ? (山田・椿坂 1989 b) として扱っている。しかし, 顕微鏡下で詳細な観察を続けた結果, このグループの種子の形態は, 発泡変形の結果生じたものではなく, サクシュコトニ川遺跡で大量に出土したオオムギとは異なるのではないかと考えられるに至っている。1989 年末になって, 十勝管内十勝太若月遺跡の擦文時代後期の竪穴住居中から土器に入ったまま出土した大量のオオムギ (後藤 1974) 資料の観察をすることが出来た¹²⁾。このオオムギは, 当初, 粉川昭平によって同定されたものであり, その出土状況の良さから関係者に注目されていた。実物資料について形態の観察や計測を行った結果, このオオムギは, その形態, 大きさともに我々が問題としているオオムギに属させて良いと判断された。その計測値を第 表にあげておく。同種資料の増加が考えられるので, 今後の作業上の混同を避けるために, この類のものを, とりあえず「擦文オオムギ」と仮称しておこうと思う。

本州においても, この種のオオムギが分布している可能性が高い。例えば, 千葉県有吉北貝塚で発見された 8 世紀初頭の SB-163 住居址埋め土から, 23 粒のオオムギ (原文では *Hordeum* sp. オオムギ属) が検出されているが (小高 1988), 写真によるかぎり問題のオオムギに類似している。

小型コムギの説明に関連して若干述べたが, 北海道でサクシュコトニ川遺跡出土したものと同様なタイプの組み合わせ—オオムギと小型コムギをセットで出土する遺跡からは, ここに述べた「擦文オオムギ」が検出されていない。それに比べて, このセットは, 本州では一般的に見られるらしい (たとえば南木 1988)。

我々の手元には西日本の弥生~平安時代に関する詳しい資料に乏しく, いまのところ, これ以上の分析は出来ない。しかし, 現生のオオムギの研究からすれば, 東日本にW型の, 西日本にはE型のオオムギが分布を異にして広がっているのである (高橋 1951)。日本列島内においては, 在来種の野菜の中にも, こうした分布圏に類した広がり見せるものがあり, これが渡来ルートの違いを暗示するかもしれないとしばしば指摘されている (青葉 1981)。こうした現象が, いつ, どのような背景で始まっ

たのか考古学的に証明出来るかどうかは別にして、注目しておかなくてはなるまい。その見地からすれば、網走市二ツ岩遺跡で、擦文土器が伴出するとはいえ、オホーツク文化の住居から擦文オオムギの出土している事が目をひく(山田・椿坂 1989 b)。なぜなら、この時期の沿海州には、すでにブタを飼育し、雑穀などを栽培していた文化が広く存在していたと考えられているからである(例えば加藤 1988) (13)。

◇コメ *Oryza sativa japonicum* は19粒出土している。計測に耐えうる標本では、長さ4.1mm、幅2.6mmで、あきらかに短粒種である(IV図24)。全て脱穀された状態で炭化して出土しており、籾の状態のものは検出できなかった。検出数が少ないのと、こうした発見時の状態からみて、この遺跡周辺に水田が存在していた可能性は、きわめて少ない。もし、何らかの形で水田を維持しようとしても、水温の点でも問題が残る。なぜなら、かつてサクシュコトニ川遺跡の周辺を流れていた河川は、全て豊平扇状地に湧出していた泉(メムと呼ばれる)が水源となっていた。その冷涼な水環境がサケ科魚類の天国を形成していたわけである。したがって、このような自然環境は、必ずしも水稲耕作に好適な状況ではなかった。いいかえれば、水田によるコメ栽培が可能になるためには、広範囲かつ大規模に森林が破壊されて裸地が増加し、その結果として作今の様に地表水の水温が上昇しなければならなかった。こうした自然破壊が、当時の住民が行っていた畑作の規模から推定して起こり得る可能性はほとんどないし、この周辺の諸遺跡から得られている花粉分析、あるいは炭化植物片の含有量の変化などの地学的な支持材料も絶無なのである。

サクシュコトニ川遺跡で発見されたものと同様の炭化米は、渡島管内松前町の札前遺跡から破損資料を含めて5粒検出されているが、ここでも周囲に水田造成の可能性がある地形環境は観察されない。地形のみならず、そばを流れている水河川は、現在でも降海性イワナが棲息する状況で、水田造成のための水源としては不向きなのである。したがって、もし両遺跡のコメが現地の生産に係わるものだとすれば、水稲ではなく陸稲であった可能性を検討した方が良い。こうした状況から判断すれば、コメは、より南西の地域からか、あるいは東北地方日本海沿岸地域から、土師器や鉄製品などと共にこの地に持ち込まれた可能性が大きいだろう。

◇その他の栽培植物◇ サクシュコトニ川遺跡からは、以上述べてきた栽培植物以外に、アサ *Cannabis sativum*

(IV図27)、アズキ *Vigna angularis* と思われるもの(IV図25)、シソ属 *PERILLA* Linn. (IV図28a~b)、ウリ科 *CUCURBITACEAE* (IV図26)、アブラナ属 *Brassica* L. (IV図29a~b)などがあげられる。この中で量的に多いものは、アサ170粒でそれにアズキと思われるものが続き、少量のシソ属がある。ウリは2例検出されただけで、詳細は不明である。アブラナ属の種子は、現在のところ8個が炭化物マウンド(大型廃棄スポットあるいは幣場か?)から検出されている。重要な植物なので、現生種を含めて調査中であるが、まだ実態はわからない。もし、これが青葉高に指摘するような洋種系のカブ(青葉 1981)ということにでもなれば、前述したような東日本に偏りを見せて分布するW型のオオムギの流入経路や渡来時期とからんで、考古学的大問題となる可能性をはらんでいると良い。現状では、恵庭市中島松5遺跡B地点報告でも述べたように(吉崎 1990)、北海道の栽培植物渡来時期やその流入路については、予想外に複雑であったと考えておく方が良いかもしれない。

6 サクシュコトニ川遺跡に見られる食料獲得戦略

以上述べてきた様に、サクシュコトニ川遺跡に居住していた擦文時代の古代人は、十分な動物蛋白を主として河川を遡上してくるサケ科の魚類を中心として充当し、しかも、広範な農耕活動を行っていたものと解釈せざるをえないだろう。まだ、彼らの保有していた耕作地の痕跡は発見されていないが、サクシュコトニ川遺跡の調査に端を発した種子分析のアプローチで詳細に調べ始められた各地の出土雑穀類や雑草資料から得られているデータを基礎とする限り、小規模な菜園農耕や焼畑しか持たなかったと結論する事は、きわめて困難なのである。

また、擦文文化人の狩猟漁撈行動を説明するのにしばしば引用される遺跡として、桧山管内奥尻島青苗貝塚(佐藤 1979)、後志管内神恵内観音洞窟(石附・石川編 1984)などがあげられる。これらは大型哺乳類を始めとする多量の動物遺体を出土する遺跡として著名であるが、ともに離島あるいは海蝕洞窟といった特別な立地条件下にある。したがって、ここで得られている生業のパターンが普遍的であるという証拠は何もない。むしろ、こうした特別の遺跡を除き、擦文文化の集落からは、それ以前あるいはそれ以後の時期にみられるような明確な形の貝塚の類がほとんどみられない点に注目すべきであろう。通常の発掘で検出される動物遺体は細片化した魚骨が中心であり、どの遺跡においても哺乳動物資料は痕跡的さえある。こうした事情からすれば、大型動物骨は集落から離れた特別の地点に儀礼的に埋納された可能性さえ読

み取れるかもしれない。しかし、これまでも繰り返して述べている様に、陸上動物の日常生活の中で占める食料としての重要度は、発掘資料を基礎とするかぎり、期待されているほどには高くないと判断されるのではないだろうか。他方では植物性食料に関する資料の増加には著しいものがある。例えば、十勝管内浦幌町十勝太若月遺跡で発掘された擦文文化後期の焼失住居からは、カマドの前から多量のオオムギを入れたままの鉢形完形土器が、中央の炉近くの板の上にはシソが山盛りになっており、そのうえ床面広くキビが散乱して検出された(後藤 1974)。こうした事例は、サクシュコトニ川遺跡資料の分析を通して得られている栽培植物に依存度の高い擦文文化人の生活復元を強く支持するものといえよう。

サクシュコトニ川遺跡から推定復元されるような生活形態がこの時期に普通のものだとすれば、海蝕洞窟や、離島などにみられる漁猟民的集落とは異なった生活が内陸部では広がっており、それらが互いに密にネットされていた可能性が考えられる。こうしたシステムの中にこそ、この時期の文化の実態があったのではないだろうか。つまり、北海道の大部分の地域の擦文文化は、佐々木高明の分類(佐々木 1988)に従えば、あきらかに『初期的農耕』を持つ文化に定義づけられるだろうし、さらに、地域によっては、稲作の欠落した雑穀農耕文化とさえいえる可能性があると考えたい(14)。

(この報文を作成するためにあたって基本構想ならびに執筆は吉崎が、走査型電子顕微鏡による撮影同定は椿坂が主として担当したことをつけ加えておきたい。)

謝辞

この報文を作成するにあたって、次の人々のお世話になった。感謝の意を表しておきたい。

北海道大学辻井達一氏、同伊藤浩司氏、同深沢和三氏、同大谷諄氏、同平川泰彦氏、神戸通流科学大学南木陸彦氏、南茅部町教育委員会小笠原忠久氏、同阿部千春氏、北海道開拓記念館山田悟郎氏、浦幌町教育委員会後藤秀彦氏、札幌市教育委員会加藤邦雄氏、同上野秀一氏、石狩町教育委員会石橋孝男氏、恵庭町教育委員会上屋真一氏、同松谷純一氏、余市町教育委員会ならびに大川遺跡調査団宮宏明氏、芦別市教育委員長谷川隆博氏、小樽市教育委員会、千歳市教育委員会、江別市教育委員会、青森県教育委員会、財団法人北海道埋蔵文化財センター、樺原考古学研究所寺沢薫氏、札幌市豊平川さけ科学館、水産庁北海道サケマスふ化場、清水システム研究所清水雅男氏、トロント大学人類学部 Gary Crawford 氏。

注

- 1: 雑草種子、アブラナ属などについては、まだ開始したばかりである。
- 2: 発掘区の北西側、現在の寮に北接して第1文化層の時期に相当する遺物、遺構が存在している。
- 3: 原報告では炭化物、炭化マウンドなどの表現で記載。
- 4: 2次堆積で、本来は文化層として扱えない。
- 5: この流域の遺跡は、どこでもこの種の堆積が観察される。
- 6: 正確には、横山は「廃絶した」と述べているだけで、その原因についてはふれていない。
- 7: 耕作地やサケ産卵床が破壊された可能性もある。
- 8: 枝川に設置されており、この時期にはこれより上流には集落がなかった可能性がある。本流域そのものより支流との合流点、あるいは支流とその枝川との合流点などに小集落が立地している事が多い。こうした集落立地条件については、以前(吉崎 1984)にふれた事がある。
- 9: ここはほぼ純粋に擦文時代の遺跡なので、混入の恐れはない。
- 10: オホーツク文化のものである可能性もある。この時期の石器の中には、その場所の居住民によって製作されたもの、どこかで採集され利用されたもの、时期的に並行する他の集団から持ち込まれたものなどがある。採集して利用するケースは、明治期まで知られている。とくに国後島では、獲物の皮剥に利用していた。金属ナイフより効率が良かったと言う。
- 11: 人口ふ化放流の場合は異なる。また、この見積りは最大級の数値であり、実際は1500~2000尾でいどが実情であったろう。
- 12: 浦幌町教育委員会の後藤秀彦氏、道立開拓記念館山田悟郎氏の好意によって可能になった。
- 13: オホーツク文化にもブタ飼育が認められる。沿海州の古代文化については、明確な資料の出土遺跡、文化層、植物の学名などにつき再検討の必要を感じている。
- 14: 東北地方の一部もこの圏内に入る可能性があるのではないか。

引用文献

- 青葉高
1981: 『野菜—在来品種の系譜』法政大学出版局
石附喜三男・石川直章編
1984: 『神恵内観音洞窟』神恵内村教育委員会
小笠原忠久
1989: 『南茅部町で検出された縄文期のアワ、ヒエ』Project Seeds News No.1, Project Seeds札幌
加藤邦雄・上野秀一編
1987: 『K135遺跡』札幌市文化財調査報告書XXX札幌市教育委員会
加藤晋平
1988: 『シベリアの先史農耕と日本への影響』佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』所収 日本放送出版協会
小高春雄
1988: 『東南部地区における古代農業資料』千葉県文化財センター研究連絡誌 第23号
後藤秀彦
1974: 『十勝太若月—第二次発掘調査』浦幌町教育委員会
佐々木高明
1971: 『稲作以前』日本放送出版協会
1988: 『日本における畑作農耕の成立をめぐって』『畑作文化の誕生』所収 日本放送出版協会

佐藤忠雄編
1979:『奥尻島青苗遺跡 図版編』函館土木現業所
奥尻町教育委員会

高橋 理
1986:『動物遺存体』『サクシュコトニ川遺跡 I, II』所収 北海道大学埋蔵文化財調査室

高橋隆平
1951:『大麦品種の分類と地理的分布に関する研究第15報』農学研究 39

椿塚恭代
1989:『サクシュコトニ川出土植物遺存体の再検討』北大構内の遺跡 7 北海道大学

直良信夫
1956:『日本古代農業発達史』さえら書房 東京

奈良岡洋一
1978:『植物性遺物の同定』『杉の沢遺跡』所収
青森県教育委員会

北海道大学
1986:『サクシュコトニ川遺跡 I, II』北海道大学埋蔵文化財調査室

南木陸彦
1988:『東京都坂橋区早瀬前遺跡から産出した大型植物遺体』早瀬前遺跡調査報告書所収

矢野牧夫
1985:『出土した植物遺体について』『札幌』前収 松前町教育委員会

山田悟郎・椿塚恭代

1989a:『札幌遺跡から産出した栽培植物について』『札幌 II』所収 北海道松前町教育委員会

1989b:『オホーツク文化の遺跡にともなった雑穀』Project Seeds News No. 1 Project Seeds札幌

藪野友三郎
1981:『ヒエ属植物の分類と地理的分布』種生物学研究 V 東京

横山英介
1989:『北大構内遺跡の土器群変遷と推定される年代観』北大構内の遺跡 7 北海道大学

吉崎昌一
1989a:『K441遺跡北34条地点出土の植物種子』札幌市文化財調査報告書 XXXVII 札幌市教育委員会

1989b:『K441遺跡北33条地点出土の植物種子』札幌市文化財調査報告書 XXXVI 札幌市教育委員会

1990a:『K135遺跡4丁目地点から出土した植物遺体』『K135遺跡4丁目地点』札幌市文化財調査報告書 札幌市教育委員会 in print

1990b:『恵庭市中島松5B地点遺跡出土の植物遺体』恵庭市中島松5・柏木川11遺跡 恵庭市教育委員会

Crowford, G.
1986:『SAKUSHU-KOTONI-GAWA PLANT REMAINS』『サクシュコトニ川遺跡 I, II』所収 北海道大学埋蔵文化財調査室

Crowford, G. and Yoshizaki
1987: Ainu Ancestors and Prehistoric Asian Ariculture. *Jour. of Archaeological Science*, 14

栽培植物種子が発見された擦文時代の遺跡

遺 跡 名	遺 構 名	時 代	出 土 栽 培 種 子
サクシュコトニ川遺跡 (石狩・札幌市)	カマド・焼土・炭化物層	擦 文 中 期	コメ・オオムギ・アワ・ヒエ・キビ ウリ・アズキ・シソ・アサ・アブラナ科
中島松5B遺跡 (石狩・恵庭市)	カマド	擦 文 前 期	アワ・キビ
南島松3遺跡 (石狩・恵庭市)	住居址内	擦 文 前 期	アワ・キビ
柏木川11遺跡 (石狩・恵庭市)	住居址内	擦 文 前 期	アワ・キビ
香川三線遺跡 (留萌・苫前町)	貯蔵穴	擦 文 後 期	オオムギ・アワ・キビ
香川6遺跡 (留萌・苫前町)	カマド・焼土・貯蔵穴	擦 文 後 期	オオムギ・アワ・キビ・シソ
K-441 N33 (石狩・札幌市)	焼土	擦 文 後 期	アワ・ヒエ・キビ・オオムギ
K-441 N34 (石狩・札幌市)	焼土・炭層	擦 文 後 期	アワ・ヒエ・キビ・オオムギ・ソバ・シソ
札幌遺跡 (渡島・松前町)	カマド・炉・床面 覆土・貯蔵穴・焼土	擦 文 後 期	コメ・オオムギ・コムギ・キビ・モロコシ
二ツ岩 (網走・網走市)	骨塚	オホーツク前期	オオムギ・アワ・キビ

第I表

遺跡出土アワの計測(平均値)

遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	1.4	1.2	1.0
香川6遺跡	1.3	1.2	1.0
K-441(N34)	1.3	1.2	0.8
中島松5B遺跡	1.3	1.2	0.9

遺跡出土ヒエの計測(平均値)

遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	1.5	1.1	0.6
K-441(N34)	1.3	0.9	0.6

遺跡出土オオムギの計測(平均値)

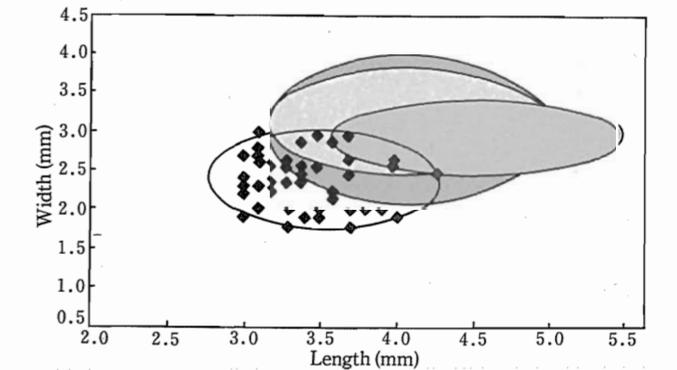
遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	5.3	2.4	1.8
札幌遺跡	5.0	2.7	2.0
若月遺跡	4.8	3.0	2.2
網走市二ツ岩遺跡	4.3	2.9	2.4

遺跡出土キビの計測(平均値)

遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	1.9	1.7	1.4
香川6遺跡	1.9	1.6	1.3
K-441(N34)	1.9	1.7	1.2
中島松5B遺跡	1.8	1.7	1.2

遺跡出土コムギの計測(平均値)

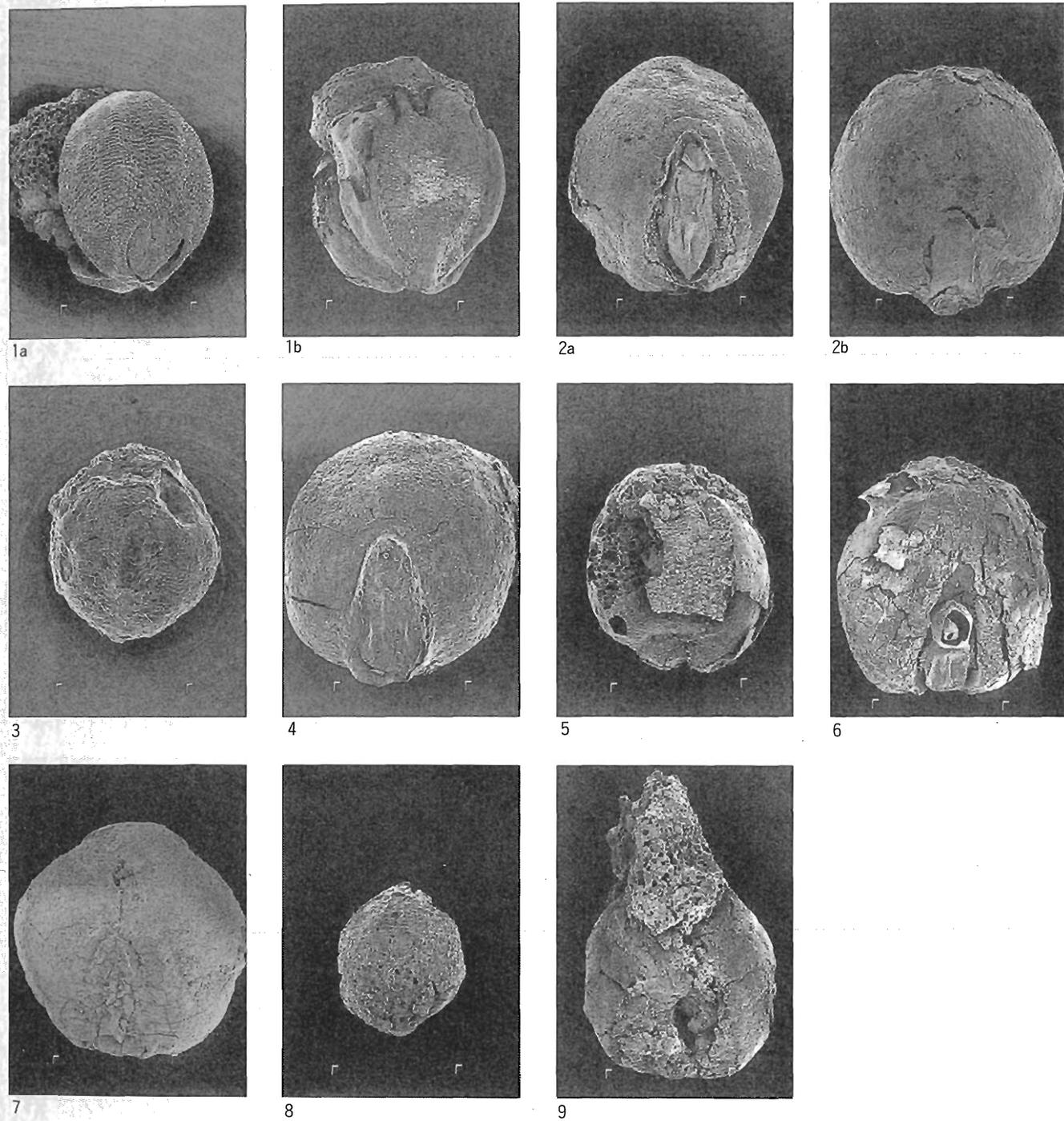
遺 跡 名	L (mm)	W (mm)	T (mm)
サクシュコトニ川遺跡	3.6	2.6	2.1
札幌遺跡	3.3	2.1	1.8



サクシュコトニ川遺跡出土の小型コムギと他の小型コムギの比較 (G. Crawford 1986による)

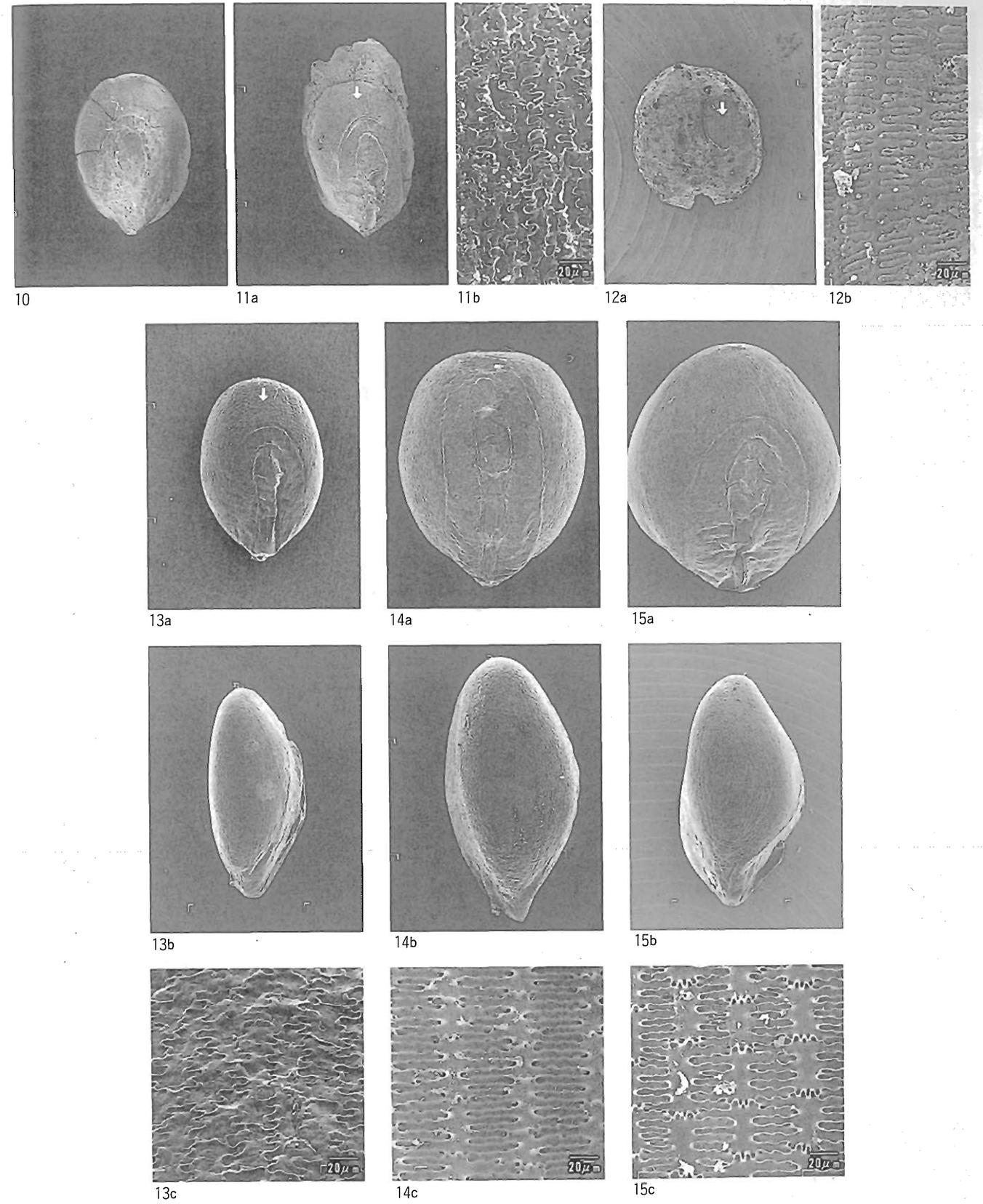
○ *T. compactum*, Dorestd; ○ 一戸遺跡のコムギ
● *T. sphaerococcum*, Pirak; ⊙ サクシュコトニ川遺跡のコムギ

第I図 擦文文化にともなった炭化種子



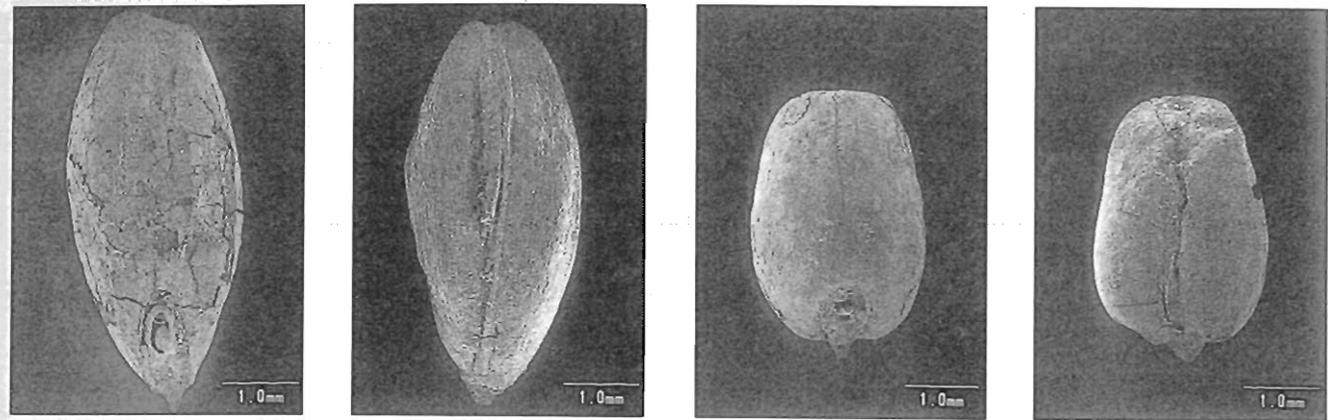
1 a サクシュコトニ川遺跡出土アワ 背面
 1 b サクシュコトニ川遺跡出土アワ 腹面
 2 a サクシュコトニ川遺跡出土キビ 背面
 2 b サクシュコトニ川遺跡出土キビ 腹面
 3 香川6遺跡出土アワ 背面
 4 香川6遺跡出土キビ 背面
 5 中島松5B遺跡出土アワ 腹面
 6 中島松5B遺跡出土キビ 背面
 7 若月遺跡出土キビ 背面
 8 網走市二ツ岩遺跡出土アワ 背面
 9 網走市二ツ岩遺跡出土キビ 背面
 スケール 「」の間隔 1.0mm

第II図 擦文文化にともなった炭化種子

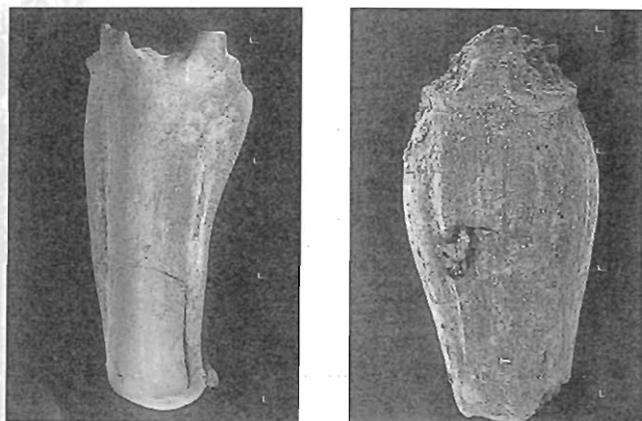


10 サクシュコトニ川遺跡出土ヒエ 背面
 11 a K-441北34条地点遺跡出土ヒエ 背面
 11 b 11 aの部分拡大 穎果の組織
 12 a K-441北34条地点遺跡出土ヒエ 腹面
 12 b 12 aの部分拡大 内穎の組織
 13 a 現生のイヌビエ 背面
 14 a 現生のタイヌビエ 背面
 14 b 現生のタイヌビエ 側面
 14 c 現生のタイヌビエ 内穎の組織 (灰像処理)
 15 a 現生の栽培ヒエ 背面
 15 b 現生の栽培ヒエ 側面
 15 c 現生の栽培ヒエ 内穎の組織 (灰像処理)

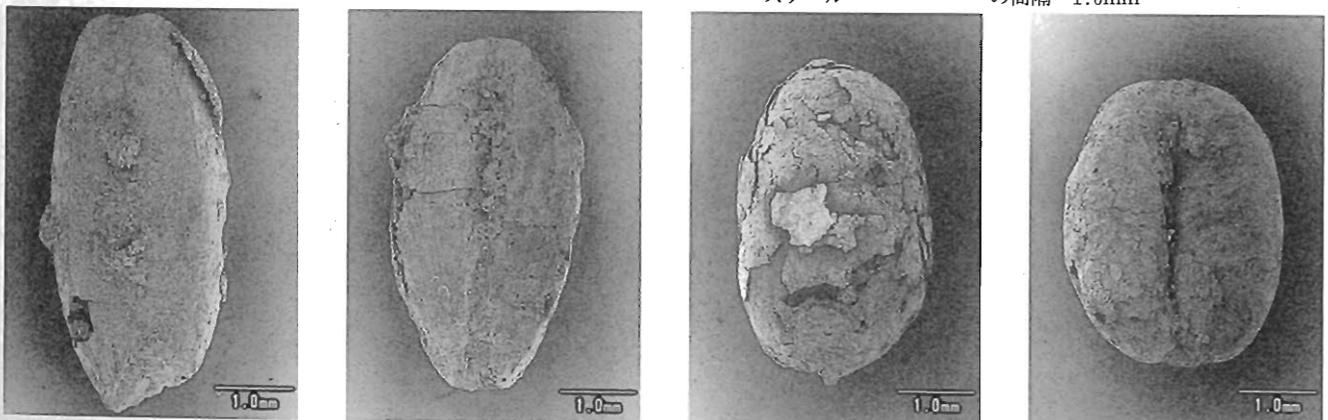
第III図 擦文文化にともなった炭化種子



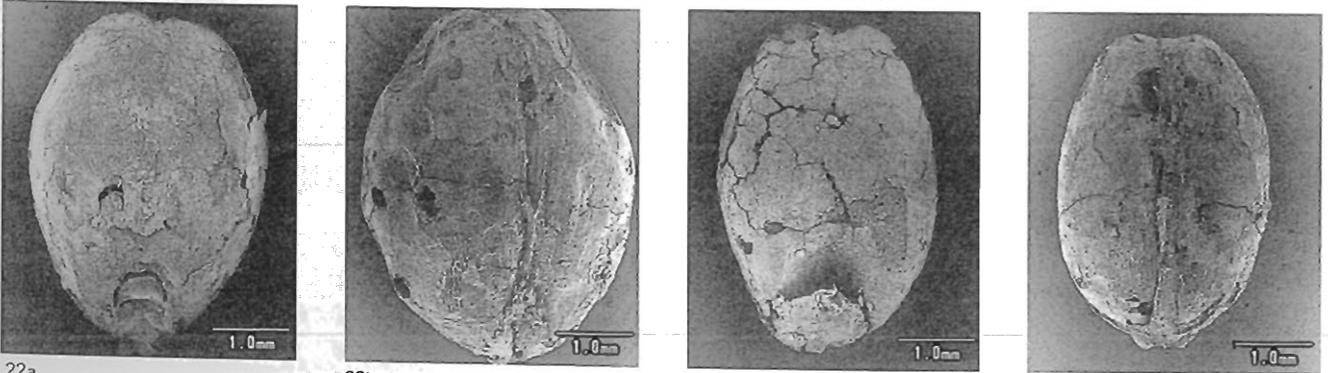
16a 16b 17a 17b



18 19



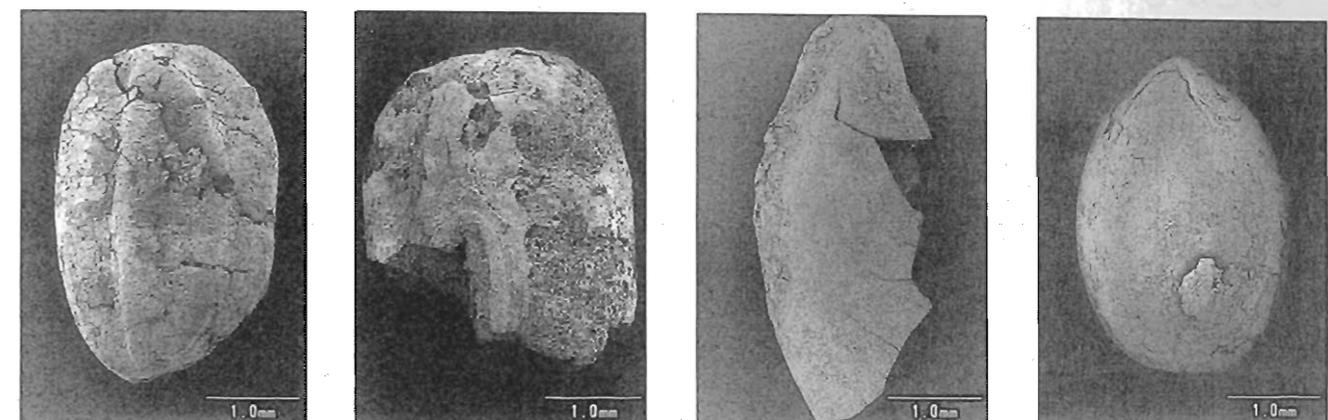
20a 20b 21a 21b



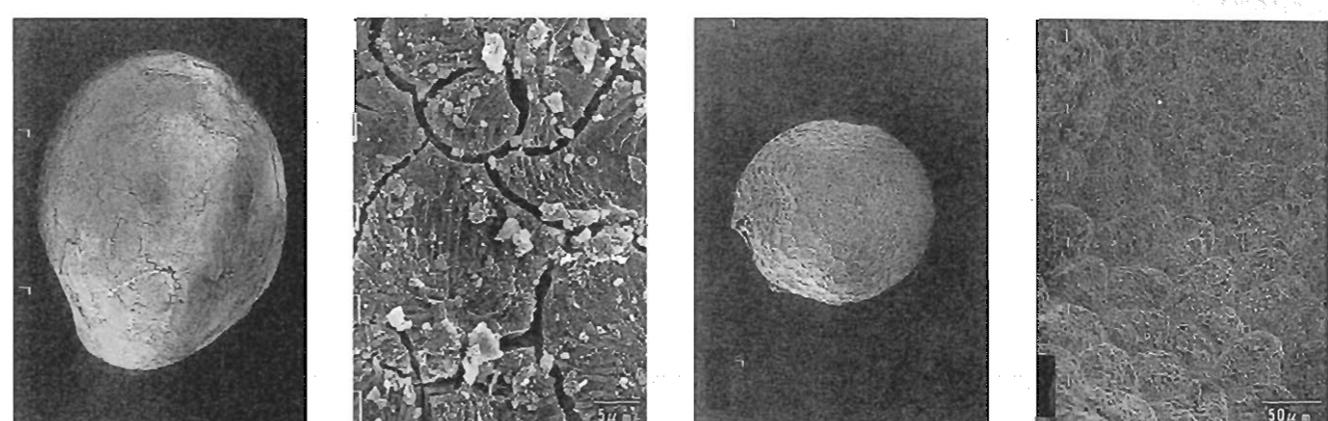
22a 22b 23a 23b

- 16 a サクシュコトニ川遺跡出土オオムギ 背面
 - 16 b サクシュコトニ川遺跡出土オオムギ 腹面
 - 17 a サクシュコトニ川遺跡出土コムギ 背面
 - 17 b サクシュコトニ川遺跡出土コムギ 腹面
 - 18 サクシュコトニ川遺跡出土オオムギの穂軸
 - 19 サクシュコトニ川遺跡出土コムギの穂軸
 - 20 a 札前遺跡出土オオムギ 背面
 - 20 b 札前遺跡出土オオムギ 腹面
 - 21 a 札前遺跡出土コムギ 背面
 - 21 b 札前遺跡出土コムギ 腹面
 - 22 a 若月遺跡出土オオムギ 背面
 - 22 b 若月遺跡出土オオムギ 腹面
 - 23 a 網走市二ツ岩遺跡出土オオムギ 背面
 - 23 b 網走市二ツ岩遺跡出土オオムギ 腹面
- スケール 「 「の間隔 1.0mm

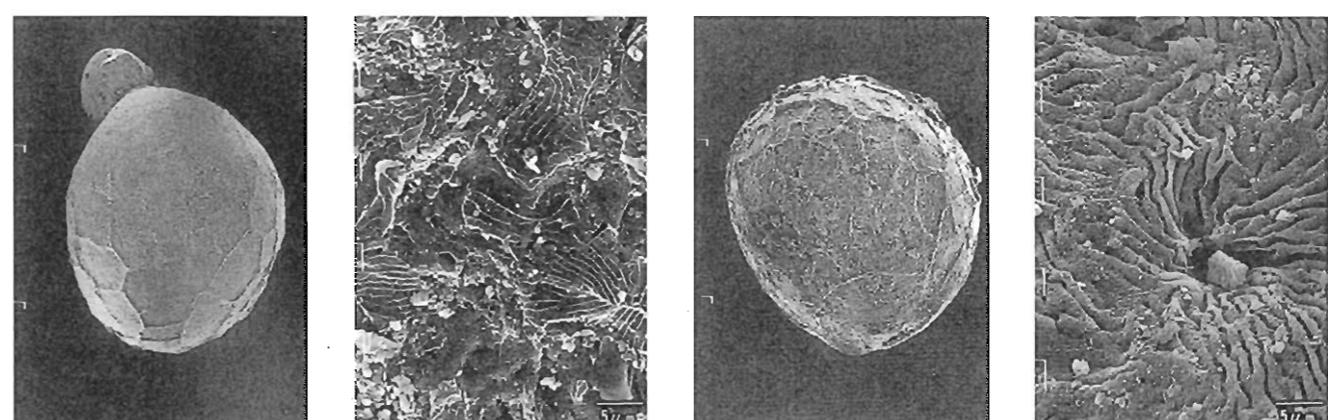
第IV図 擦文文化にともなった炭化種子



24 25 26 27



28a 28b 29a 29b



30a 30b 31a 31b

- 24 サクシュコトニ川遺跡出土コメ
 - 25 サクシュコトニ川遺跡出土アズキ
 - 26 サクシュコトニ川遺跡出土ウリ科
 - 27 サクシュコトニ川遺跡出土アサ
 - 28 a サクシュコトニ川遺跡出土シソ属
 - 28 b 28 aの部分拡大
 - 29 a サクシュコトニ川遺跡出土アブラナ属
 - 29 b 29 aの部分拡大
 - 30 a K-441北34条地点遺跡出土シソ属
 - 30 b 30 aの部分拡大
 - 31 a 若月遺跡出土シソ属
 - 31 b 31 aの部分拡大
- スケール 「 「の間隔 1.0mm

あとがき

「北大構内遺跡 8」をお送り致します。平成元年度中は、大規模な調査はなかったのですが、横山氏の報文にある通り、小規模の発掘が繰り返されました。調査室内では、各種の整理研究作業が続行されています。また、国際交流基金の派遣でトロント大学博士課程のキャサリン・ダンドレア嬢が資料研究のため6ヶ月の滞在、同じく同大学のG・クロフォード助教授も資料調査に来室されました。最近では日本国内の研究者のみならず、この様な海外からの研究者の来室も増加して居りますので、新年度からは資料室の整備に一層努力し、ミニ博物館として、いつでも、どなたの要望にも応えられますように致す所存です。

表紙のカットは大学本部施設部の吉田政則氏の手になったものです。

調査室開設以来、調査員として現場の指導や資料の研究にあたってられました横山英介氏は、本年3月末日で退職され、専門研究の道を歩まれる事になりました。プロジェクト委員ならびに調査室スタッフ一同、心から氏の新しいフィールドでのご活躍をお祈りしたいと思います。また、この3年間、調査室と大学本部の間でいろいろと作業調整を行なって下さった施設部総務掛北山秀壽掛長も2月1日付けで放送大学の方にご栄転なさいました。これまでの大変な御苦勞に感謝したいと思います。

吉崎 昌一

北大構内の遺跡 8

平成元年度 (1989年度)

平成2年3月25日 (1990年発行)

発行所 北海道大学 (埋蔵文化財調査室)
札幌市北区北8条西5丁目

編集者 吉崎昌一

印刷所 (株)中西印刷
